



1993 8 北海道美術館学芸員研究協議会

談輪

「知的で美しく」

岡田 淳子 氏 北海道東海大学国際文化学部教授

米国の友人が言うには、研究を主にしようと思う者は博物館に勤め、教育を主にしたいと思う者は大学に勤めるのだそうだ。4半世紀も前にこれを聞いた時には、日本の学芸員との立場の遠さを思わずにはいられなかった。しかし、現在の日本は既にその頃の状況を通り越している。博物館の建物とその周囲をとりまくいわゆるハードの面は、ヨーロッパの歴史的深さに並ぶ程の趣きを持つようになったし、ソフト面についても学芸員をはじめとする内部のたゆまぬ努力によって、質的な充実がはかられてきた。「研究をしたいなら学芸員」の声が近くなったように感じられる。けれどもまだ努力は続けなければならない。

20世紀後半の米国では、物を並べるヨーロッパ型の博物館から脱皮し、雰囲気の中に身をおくアメリカ型の博物館を目指してきた。そのためには所蔵品を軸とする総合的な教養と専門的な知識が求められる。ポストン美術館に例をとるならば、日本美術のセクションは日本にいるような東洋の気分で鑑賞でき、浮世絵の

質問に対する学芸員の応答は、所蔵品収集の経緯から作者、制作過程、類品に至るまで、半端なものではなかった。また、小さな町の小さな美術館で、地域の美術を紹介していた唯一人の学芸員には、その学識とセンスのよさに酔わされた。これらの例のように、研鑽を重ね学芸員として自分自身を高めることは誰しも望むところだ。しかし、次に時間の不足が問題になってくる。時間を生み出すには様々な工夫が必要であるが、現状では思い切って行事を減らすしかないのかもしれない。行事の多さもまた日本人が社会のために勤勉すぎる表れであり、これからはもっと自己のために勤勉でありたいと思う。

最近、ある女子学生が美術館学芸員に憧れているというのを聞いた。近所に女子学芸員が住んでおり、知的で美しくその上優しくて、中学生の頃から将来自分もあのような人になりたいと思っていたのだという。極当たり前の評価であっても、学芸員が見直されていることを知ったのはとても嬉しいことだった。

談輪／知的で美しく……………	1
＜平成4年度総会抄録＞	
講話／美術館と現代美術……………	2
研究・研修発表報告／カナダの現代美術……………	3
実践報告／美術館とワークショップ……………	4
／“生れ出づる悩み”をめぐる絵画と彫刻……………	5
研究協議／日頃の問題点等……………	6

各館便り／岩内は今……………	7
／開館した神田日勝記念館……………	8
考えの小窓／ホーキングと2600語のワープロ……………	9
道美学芸研規約……………	9
会員名簿……………	10
発信・受信……………	10

講話

美術館と現代美術

芸術の森美術館の企画を通して

笹野 尚明

現代美術について、その“現代”をどう捉えるかということや、概して入館者が少ない現代美術の展覧会にどんな意義をもって企画、開催するかなど、現代美術を扱う上には多くの問題がある。ここではいくつかの問題提起ということでお話をさせていただきたい。

“現代”ということを考える前に、我々の美術館が開催した展覧会とその観覧者数を見てみると、「ロダン展」(50,975人)に始まり、「芸術が都市をひらく」(3,076人)、「アメリカの現代絵画1960-80」(10,095人)、「クリスト展」(7,551人)、「小谷博貞展」(3,648人)、「北の創造者たち展」(1,631人)、「ホックニーのオペラ展」(8,567人)などがある。これらの中で「芸術が都市をひらく」「クリスト展」「北の創造者たち展」「ホックニーのオペラ展」は、当館では“現代”の範疇でとらえている。評価は定まっていないが話題性のあるものということである。

“現代”について考えてみるといくつかの捉え方ができる。まず、今日これからという考え方がある。「北の創造者たち展」はこれに属するのではない。道内の若手作家に絞り自由に作品を発表してもらったため、経費的にはたいへんであった。展示室への土の搬入や作品素材に付着していた虫のため展示室の燻煙を余儀なくされたりもした。

第2として、ここ10年ほどとする考えである。“十年一昔”という言葉もあるが、ある程度の評価が行われ、テキストも探そうと思えばいくつか見つけられる。クリストやホックニーはこれにあたるだろう。

第3として、1950年以降とする考えである。終戦による世情、価値観の変化を一つの節目と見ることが出来るからである。ポップ・アートはこれに入れること

ができる。

第4として現存する作家という考えもあるが、もっと進歩的に現代を考えると未来を探るということもある。つまり、知られていない世界を紹介することであり、未発掘の物故作家を紹介することも現代だという人がいる。新しい視点を与えることが現代であるという考え方だ。

次に“現代”の取り上げ方について考えてみたい。最も簡単な方法としては傾向の紹介に留めることである。客観的状况だけを示し論評はあまり加えない方法である。しかし、現時点での意義を提示し、美術館として評価することへの責任を持たなければならない。または作家選定にあたって、館内外の構成委員による選考委員会を設け、客観性を持たせるという方法もある。しかし、“現代”を取り上げると一般の関心は低い。現代美術はジャンルを越えるという傾向があるが、一般にはなかなか理解し難い。私は大学で美術(教養)の授業を持っているが、彫刻というものは彫られたものを指していると思っている学生が半数以上いた。新宮晋のような作品は、彫刻とは思っていないのである。切ったり溶接したりしても、空間を占有するものであれば彫刻だということを説明して始めて納得するのである。つまり、現代美術は分からないということが関心の低さの一番の要因であろう。教育学ではモチベーション(動機づけ)を重視する。学習意欲がわくためには、知識や経験の範囲内で、ある程度努力することによって理解できるということが大切なのである。我々が提示してきた現代美術の展覧会はそのままで至っていたといえるだろうか。

“現代”というものの定義を限定していくには、どういう価値判断で意義付けていくかが大切である。美術評論家などの“現代”の捉え方と、美術館という多くの人達に対して責任ある立場での捉え方とでは相違があるかも知れない。しかし、たえずその意義だけでも明確にする姿勢でいなければならないと思う。

(芸術の森美術館副館長)



研究・研修発表報告

カナダの現代美術

佐藤 友哉

北海道立近代美術館では1995年に、カナダの現代美術を紹介する展覧会を開催する予定でいる。それに先立って、カナダの現代美術の状況を調査する機会を得たので、その状況について知りえた範囲で報告したいと思う。

現在のところこの展覧会は、当館のほかには世田谷美術館と京都国立近代美術館の三館で開催することが計画されている。事前に三館の学芸員が打ち合わせを持ち、どのようなヴィジョンで展覧会を構成するかを話し合ったが、カナダの現代美術の動向といっても、他の国と同様にきわめて多様であることが予想される。それを網羅的に紹介するよりも、ある程度ポイントを絞り、今日的表現や、日本の視点といったものがはっきりと出るものにしたいほうがよいのではないかという方向づけがなされた。そして、次の三つの表現に絞って作家・作品の調査をすることにした。それは①写真表現を取り入れているもの、②マルチメディアのインスタレーション、③ビデオなどの映像表現をインスタレーション的に扱ったものである。これをカナダ側に伝えて、会すべき作家や画廊、ギャラリー、美術館などをアレンジしてもらうようにしたのである。

カナダでの調査は1992年の10月10日から25日まで、調査先はヴァンクーヴァー、トロント、モントリオール、オタワの四都市である。調査日数は異動日を除いた実質10日あまりだったが、その間約30作家と会って作品を調査し、約20の画廊、ギャラリー、美術館などの施設を訪問するというかなりハードなスケジュールだった。だが概して言えば、これまであまり知られていなかったカナダの現代美術の力強さに触れることができたし、また質の高い作家が何人か発見できたことは収穫だったといえよう。

ヴァンクーヴァーでは、ヴァンクーヴァー・アート・ギャラリーや、プレゼンテーション・ハウスという名の、パラレル・ギャラリーと呼ばれる半官半民のギャラリーなどを訪問し、ケン・ラム、イアン・ウォーラス、アル・マックウィリアムス、ロドニー・グラハム、スタン・ダグラス、ジェフ・ウォールらの作家に会った。このうち興味深かったのは、そのおおよそがミニマル・アートやコンセプチュアル・アートをひきずったような表現が強かった中で、それを抜け出し、あるテキストを基にしてそれをいわば脱構築する仕事を積

極的に進めているロドニー・グラハム、また写真によって絵画の骨格を復権し、そこに今日的な社会問題を盛り込んだジェフ・ウォールの仕事であった。

トロントはカナダの中でも作家を数多く擁する都市で、ギャラリーも多く、また現代美術にも力を入れているオンタリオ州美術館（AGO）やパワー・プラントといった内外の若手作家を積極的に紹介するパラレル・ギャラリーがあり、活気に満ちた状況を呈していた。ここでは、ロビン・コリアー、キム・アダムス、ノエル・ハーディング、アーノルド・マッグス、スプリング・ハーバット、クリスティアン・デイヴィス、リズ・メイゴーらの作家に会った。これらの作家はそれぞれに独自の世界を創造しているという点で興味深かったが、広告ボードなどで構成的なインスタレーションを試みるロビン・コリアー、プラスチックのオモチャや乗り物などでファンタジックかつアイロニカルな世界を構築するキム・アダムス、インディアンなど土着の世界と私的なロマンティズムを交差させたインスタレーションを展開するリズ・メイゴーらが印象に残った。

モントリオールはさすがにケベック州ということもあって、文化の基盤が他と全く違う。ここにはモントリオール現代美術館や、モントリオール美術館があり、それぞれにカナダの現代美術のコレクションがある。ここではカナダの戦後美術の流れを見ることができたが、それはやはりアメリカの強い影響をうかがわせるものだった。また充実した活動が続けている画廊や質の高い作家も多く、トロントとともにカナダの美術の中心地であるといつてよい。ジュヌヴィエーブ・カデュエー、ヤナ・スターバク、バーバラ・スタインマンといった、写真、オブジェ、文字、あるいはパフォーマンスなど、多様なメディアを駆使しながら、それぞれにインパクトの強い表現をくりひろげる作家には特に注目された。また建築家として活躍しながら、過去の建築の引用、折衷を軸にしてポスト・モダンの流れの中で仕事をするマービン・チャーニーといった作家もいた。

このほかオタワではカナダ国立美術館で今回の展覧会の進め方について協議したが、カナダ文化省が展覧会の資金的なサポートを約束してくれるなど、展覧会の実現に向けた話が交わされた。この調査を基に、作家を絞り込んでいく作業が開始されることになろうが、他民族の集合体であるカナダの社会や、広大な自然とテクノロジーを背景とする表現、そして何よりもインパクトの強いフレッシュな表現を日本で見てもらえるようにしたいと考えている。

（道立近代美術館学芸第一課長）

実践報告

美術館とワーク・ショップ

——帯広美術館の試み

光岡 幸治

帯広美術館では、毎年1回市民参加によるワークショップを企画実施し、これまで2回試みてきた。平成3年の開館の年には「アートウォッチング91 美の現場＝岡部昌生 都市・市民・フロッタージュ」と題して帯広市内各所において巨大なフロッタージュ作品を制作した。続いて昨年度は、「アートウォッチング92 美の現場＝矢柳剛 宇宙へのオマージュ」をテーマに当館のモニュメント広場において、葉を積み上げるインスタレーションを行った。

この事業は、一般的に敬遠されがちな現代美術に親しむ機会を提供しようとするものでもあり、現在活躍中の作家の作品を紹介する企画展に先だって、ワークショップの一形態として市民参加の公開共同制作を行った。そして、制作した作品もこの企画展で展示することにより、公開共同制作と企画展を連携させている。ただ単に展覧会という形式で現代美術を紹介するだけでなく、実際に作家とともに制作に携わる経験を通して、問題意識の高揚を図るとともに、理解と認識を深めてもらおうとする試みである。また、美術館で企画された展覧会を鑑賞するという受け身の姿勢ではなく、自ら美術館の事業をともにやっているという市民の意識を助長することにもなる。「アートウォッチング」という名称は、作家の制作現場を公開することにより、その手法や造形精神を直接紹介する事業であるということによるものである。

制作の内容は、作家の考案したコンセプトに基づいたものであり、これまでの二回は、公開共同制作として行った。これは難しい技法などは一切必要としない簡単な作業によるものであった。したがって、だれでも参加することができるので、生涯学習の観点からも有効な試みであるといえる。また、市内の学校に学年、

学級あるいはクラブ単位での参加を呼びかけ、学校教育との連携も図った。

では、これまで2回の事例を紹介する。2回とも作者との綿密な打ち合わせ、実施場所の調査、関係機関との交渉、材料の手配、紙面での参加者募集など、十分な準備をして事業の当日をむかえた。第1回の岡部氏による事業は、当館の開館記念日である平成3年9月22日をはさんで延べ6日間の公開制作を行った。前半の3日間は市内各所において作家自身による公開制作として行い、後半の3日間は市民参加の公開共同制作を実施した。後半の公開共同制作は帯広駅1番ホーム、藤丸百貨店前、駅前広場、帯広神社、松光寺、美術館前の順にそれぞれ移動しながら、通りがかりの飛び入り参加者も含めて路面に白い布を敷いてその上から赤いオイルチョークで擦りとり、3日間で総計225メートルの巨大なフロッタージュ作品を完成させた。参加者名簿だけでも300名を越える大勢の人々による一大プロジェクトであった。

続いて2回目の矢柳氏による葉積みのオブジェ制作は、平成4年5月2日、3日の両日、当館前庭のモニュメント広場で行われた。今回の事業は、とりわけ作家の出身校である農業高校から大量の葉を提供していただき、オブジェの素材とした。また作家の高校時代の友人たちに全面的に協力を得るなど、市民の参加者は2日間で延べ100名を越えた。

また、公開共同制作の後には作家の画業を紹介する企画展を開催し、それぞれの企画展会期中には、トークショーを実施した。第1回目は詩人の吉増剛造氏を、2回目は建築家の毛綱毅曠氏を招き、公開共同制作の体験をもとに各作家とさまざまな視点から討論が行われた。

これらの試みは、公開共同制作、企画展、トークショーという一連の事業を通して行うところに大きな特徴があり、美術館で現代美術を紹介するための新たな方法の一つであるといえよう。これまで2回行ってきたが、さらに継続してまとまった成果をおさめることが今後の課題としてあげられる。

(道立帯広美術館学芸員)



実践報告

“生れ出づる悩み”を めぐる絵画と彫刻

——荒井記念美術館のテーマ展

釜沢 恵子

1. 荒井記念美術館設立の由来

平成元年6月に岩内町に開館した私設の美術館、荒井記念館は、東京出身で出版業を営む荒井利三氏が私財を投じて建てたものです。荒井氏は、若い頃から有島武郎の文学に心酔していました。岩内で生涯を送った画家、木田金次郎がモデルの有島の小説『生れ出づる悩み』を記念する美術館の建設を思い立ち、最初は木田作品を展示する予定でしたが、岩内町で木田美術館をつくることになり、その構想を断念し、この小説をテーマに新たに作品制作を依頼したのです。

2. 第一回「生れ出づる悩み」展について

北海道在住あるいは出身画家に『生れ出づる悩み』をテーマに制作を依頼し、完成したのが、この展覧会の作品です。作家選定は、美術顧問の鶴田桂子氏と荒井利三氏が当たりました。また、専門的立場から指導、助言をいただく美術専門委員として、鬼丸吉弘氏、近美の佐藤友哉氏、彫刻家の岩下碩通氏が携わりました。

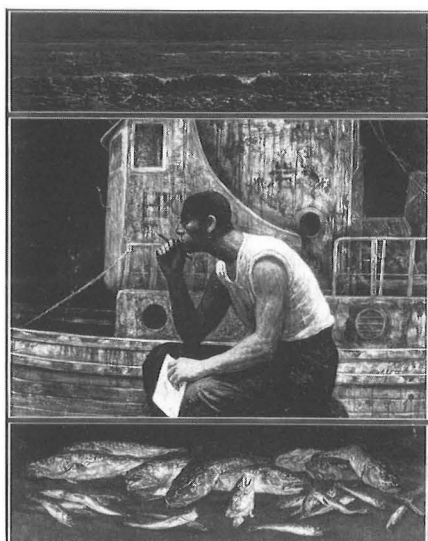
作家は、赤穴宏、蛸子善悦、小川原脩、小野州一、神田一明、久保守、砂田友治、田中忠雄、橋本三郎、伏木田光夫、松島正幸、山岸正己（敬称略）の12名です。

鬼丸氏は序文の中で“まさに有島文学との出会いによって、まぎれもない一つの精神的高揚をそれぞれのうちにもたらし、それがこの様な形に結晶化されていることを、実感する者である”と述べておられますが、文学を主題としながら、その主題を自らの造形意図へと発展させていく個々の作家たちの苦闘が現れた作品群となったことは確かです。

3. 第二回「生れ出づる悩み」展について

平成4年4月、別館の2号館の開館に伴い、この展覧会の開催が決定しました。作家選定には鬼丸吉弘、佐藤友哉、柴橋伴夫氏の三氏にお願いしました。中堅、若手に選定基準を絞り、更に審査による大賞と特別賞も設けました。

開催趣旨は、当館の設立の契機となった有島の小説『生れ出づる悩み』の存在を新たな角度から際立たせ、同時に若々しい才能に光をあてる試みとして、課題作による競作展としました。作家は、阿部国利、遠藤ミ



西田陽二「若き漁民画家の肖像」第二回展大賞受賞作品

マン、川本ヤスヒロ、北浦晃、木村訓丈、黒阪陽一、瀬戸英樹、豊田満、中本昭平、西田陽二、羽生輝、森弘志、矢元政行、輪島進一（敬称略）の14名です。大賞は西田陽二氏、特別賞は瀬戸英樹氏に決定しました。

佐藤氏は序文の中で“今回特徴的なのは、半数以上が画家、すなわち木田金次郎（小説では木本）を画面に登場させていることである。小説に描かれた、生業と画業との葛藤の中で苦悶する作家像が、おそらく今回の出品作家自身の姿とオーヴァーラップしていたからにちがいない”と述べられているように、人物を中心とする作品が多く集まりました。

4. 荒井記念美術館大賞展'93について

今までのテーマを更に敷衍させていくことで現代にひきよせ、自分たちの命の課題の思考を深めたいと考え、現代の思惟をなす彫刻の競作展をもって、荒井記念美術館大賞展'93としました。

作家選定は、前回の三氏に加え、彫刻家の岩下碩通氏の四氏です。作家は、秋山知子、阿部成孝、岡部淳一、川名義美、小林繁美、鈴木吾郎、中江紀洋、永野光一、丸山隆、渡辺行夫（敬称略）の10名です。この展覧会は、平成5年8月から一般公開の予定です。

5. 最後に

今までご紹介した3回の展覧会を通して、有島武郎の小説『生れ出づる悩み』をテーマとするコレクションができあがり、それが、当館の一つの特徴を成していると思います。岩内という地域性と風土性、そして木田と有島との結びつきをしめす文学の存在がこのような展覧会を生み出すきっかけになったといえるでしょう。

（荒井記念美術館学芸員）

◀研究協議

美術館と現代美術

ここでは現代美術と一般鑑賞者との間の大きなギャップが話題の中心となり、そこから敷衍して、はたして美術館で現代美術を紹介する意義は何かという論議もなされた。以下にその概要をまとめておきたい。

・現代美術が学芸員にとって興味深くて一般鑑賞者に受入れられるかどうか。現代美術を美術館で紹介する際の最大のネックである。

・たとえば外国の現代美術に対し専門的知識をもった人がおもしろいと思って日本にもってきても、受入れられるか疑問に思う。観衆と現代美術のギャップを埋めるものはなにもないのではないか。

・現代美術はわかりづらいとよくいわれるが、同時代の美術を紹介するのは美術館としての使命といえる。一部かもしれないが若い人たちは現代美術に対し興味をもっている。

・道立旭川美術館で開催した現代美術の展覧会でアンケートをとった。わからないものもあるが、わかるものもあるという回答も少なくなかった。同時代の特に若い作家が、どのような創作をしているのか知りたかった、このような展覧会でめぐりあってよかった、と答えている人もいた。

・現代美術といっても、かつては印象派も現代美術であった。同時代的美術を現代美術というのか、時代の先端にあるのをいうのか。またこれらをどのように組み合わせていくかは美術館の方針による。美術館の事業は、地域の住民と同じ歩調か半歩先をいくようであれば、人はついてこない。特に半歩先というのは、若い人たちに対象をしぼった場合は必須になる。どうみせるのかの切り口を学芸員の努力でくふうしていかなければならない。

◀研究協議

日頃の問題点等

1. 評価の定まらない現代美術の作品について、どのような価値判断で收藏していくべきか。当館はほとんど寄贈、しかも小樽にゆかりの作家。収集するばあい、なんらかの根拠が必要となるが。

(市立小樽美術館)

- ・小樽美術館で現代美術をどのように位置づけるかによるのではないか。
- ・評価の定まらない現代美術の収集は、やはりその館の基本的方針としての問題。収蔵庫などの物理的問題など、さまざまな要素がからみあう。
- ・評価の定まらない作家の問題はむづかしい。収集委員会をつくって、判断していく必要があるだろう。

2. 学校5日制実施に伴って、各美術館ではどのような小中学生向きの教育普及プログラムがなされて

いるのか。

(市立小樽美術館)

- ・学校5日制になっても小中学生が急にたくさん来るということはない。各館の運営方針、これまでの事業のもちかた、さらに予算や職員の定数といった問題もある。

- ・この件につき全国美術館会議のアンケートで観覧料の軽減、あるいは特別のプログラムをつくるか等の意見を求められた。5日制だからといって、それにあわせて対応することはいかがなものか。この問題は家庭や学校がどう取り組んでいくかという問題もある。

- ・あまり5日制にこだわらず、日頃考えている子どもむけの事業の充実をはかるべきではないか。たとえば道立近代美術館はこの制度以前から夏休み、冬休みに実施してきた。

3. 額装されていないデッサン等、紙を支持体とする作品の保存方法と額装する場合、裏をテーピングする方法の是非。

(札幌彫刻美術館)

- ・業者は額装の時、必ずテーピングをする。これはゴミの問題とさまざまな人の手にわたるので盗難防止の意味もある。しかし美術館でそれが何かどうかは別問題。芸術の森美術館では特にしていない。
- ・たとえば町田市立国際版画美術館では、マットに入れて保存しており、展示する時に額に入れている。

4. 野外設置の場合等、ブロンズ作品の保存、管理の方法について。

(札幌彫刻美術館)

- ・芸術の森美術館は開館当初は館の人間が作品をからぶきなどしていたが、現在は業者に委託している。ブロンズはそのままでもいいが、緑青のながれや鳥の糞などは気になる。酸性雨は計ってもらったが問題はなかった。汚れがめだつようであれば、予算化して業者委託をしてはどうか。

- ・芸術の森美術館のビーゲランの作品は、鋳造の問題でなから石灰が出てくる。きれいに表面を洗い、うるしのタンボンずりによる効果を試してみたい。

- ・道立旭川美術館でそれをやってみたが、まったく質感がちがってしまった。作品の表面の質感によるだろう。また野外彫刻は定期点検が必要だ。

5. 借用作品の事故における基本的処理、対応について。

(道立近代美術館)

- ・ある貸出作品が額が弱っていたということで連絡もなく手を加えられ、事後報告でそのことが判明した。対応に問題がある。
- ・たとえ額であろうと借用作品に対し手を加える場合は、借用先に判断を仰ぐべきである。常に基本的処理のありかたに留意しなければならない。
- ・作品の取扱については、現状登録と保存維持が大原則。なにかあった時はスピーディに処理することが必要だが、その際担当者だけの判断で行うのは危険。この機会に基本的な処理、対応のありかたについて認識を新たにしよう。

《各館便り》

岩内は今

岩内町木田金次郎美術館 開設準備室から

久米 淳之

▽今や荒井記念美術館で名の通った岩内町に、1994年11月の開館を目指し、1200㎡程の敷地に、4つの展示室、収蔵庫、ティー・ラウンジ、ミュージアム・シアター、ミュージアム・ショップを備えた木田金次郎を常設展示する美術館の開設準備室が設置された。人口1万8千弱の海辺の町で、空洞化の進む中心市街地の中央に美術館は建設される。その意味は何か。

▽今や基幹産業である漁業も衰退し、「何で食って行くのか」羅針盤を失ったこの町に、木田という、ある意味では荷の重すぎる一大モニュメントを掲げ、安っぽい「町おこし」に止まらない、町の人づくりを根本的な課題としているのだ。

▽よりよい「人」ができれば、よい「町」ができる。そこから新しい「文化」も生まれる。そうしてこの「町」は潤う事になる。「生涯教育」という言葉で、もう中央の教育機関で語り尽くされた概念が、漸くこの準備室で生々しく出来上がった。現在の業務は、専らそうしたソフトを叩き上げることで、6月末から建設予定地に打ち込まれた杭を尻目に、美術館の基本機能を模索し始めたところである。

▽一昨年末に新発見となったものを含め寄託・寄贈を合わせて油彩50点、色紙・デッサン200点でスタートすることになるが、木田金次郎美術館として必要な内容を今一度検討し作品調査も始めている。3つの展示室を使った常設展示に加え、予備の4番目の展示室では、木田に纏わる作家を絡めた特別企画、また地元作家等を対称に、貸館する構想もある。

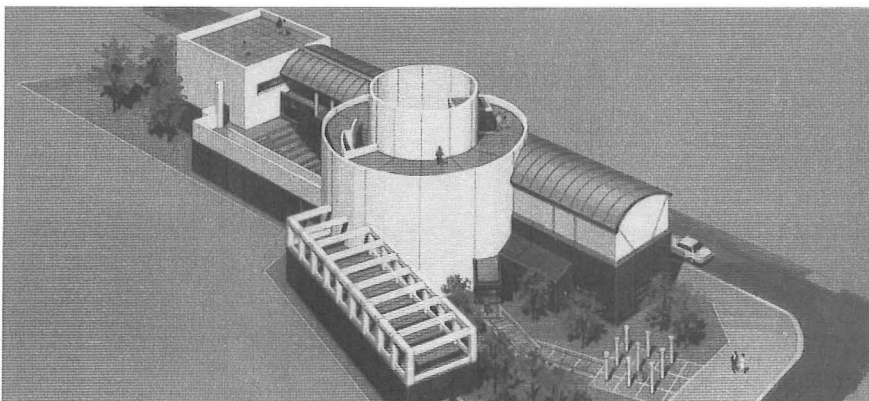
▽シアターは、ハイビジョン対応できるよう、目下ハード対応の補助金を探している。ソフトに関しては、この程電源立地の補助金がつき、この町の「風土」「民度」を表現するコンセプトでハイビジョンでの撮影がはじめられた。

▽そんな準備活動のなかで、地域住民とのコンセンサスも得られて行けたら、と思っている。

▽何より、そうした目的を達成させるための運営体制、人的構造がどうあるべきか、それが可能なのか、最大の問題も未だクリアされていない。今後も諸事に渡って、美術館関係の皆様のご指導をいただかなければ、不安でしょうがない。道美学芸員研究協議会に加えていただいて、感謝に絶えない。

▽山ほどの課題を抱えながら、自分の夢みていた「学芸員」とは何なのか、仕事をさせてもらいながら探っていくのもわるくはない。そんなことを考えながら、海に降る星を横目にして、夜なべ仕事の日々を過ごしている。

(木田金次郎美術館開設準備室学芸員)



- 館本体のコンセプト 駅跡地という構想から生まれた、ターン・テーブル(転車台)の形状。シリンダー部=ターン・テーブル 展示室・収蔵庫・事務室=列車本体
- 展示室 4室。3室は木田の常設展示スペースとし、企画展示の際、展示面積確保のためもう1室を設ける。
- 講堂 ミュージアム・シアター 映像(ハイビジョン、スライド等)を利用して、木田の作品・生涯を解説。常設展の導入部分に設置され、映画上映会等も行う。
- 多目的展示コーナー シリンダー部2Fの回廊に設置。木田の作品以外の資料(写真・書簡等)の他、情報資料や逸品物等、ギャラリー的な多目的展示コーナー。
- 展望回廊 シリンダー部屋上。木田が画因として愛し続けた景観である岩内岳や日本海を展望できるスペース。

《各館便り》

開館した神田日勝記念館

営 訓章

平成5年6月17日、鹿追市街の入口の国道沿いに、グレー調で統一された神田日勝記念館がオープンしました。正面玄関には絶筆「馬」(未完成)のロゴマークが取り付けられ、記念館のシンボルとして訪れる人々の目を引きつけています。また外構工事も順調に進み、近接する町民ホール、トリムセンターと共に生涯学習施設のゾーンが形勢され、広々とした芝生は公園としても人々に憩いを与える地域になっています。

この記念館が広く全道的に注目されたのは、日勝氏の病没後昭和46年東京の柳屋画廊の遺作展、47年鹿追遺作展、そして道立近代美術館・東京小田急グランドギャラリー・帯広市民会館と巡回した53年の「神田日勝の世界展」、さらに昨年道立近代美術館と下関美術館の共同企画で開催された「日本のリアリズム」展を通して彼の存在が知られるようになったからであり、また日勝氏の画業を整理・主張してこられた記念館長米山将治氏と道立近代美術館の学芸員の方々の学芸活動の結晶であろうと思います。

一方地元においても、巡回展『神田日勝画集』発売のほぼ同時期に、青年文化集団「らんぷ」が『神田日

勝』を公刊したことが契機となって記念館建設運動が形成されていきました。59年には「記念館建設実行委員会」が組織され、ここに本格的な住民運動が展開されることになりました。そして平成2年度、岡野友行町長の決断で建設が決定、年輪の村構想の一環として位置付けられ、遺作絵画購入にふるさと創生資金の一部があてられました。

完成した記念館は総面積1,000㎡、鉄筋コンクリート2階建てで、1階には油彩の代表作、2階には素描・遺品・アトリエ復元コーナーのある展示室が配置され、1階ロビーには解説LDが設置されています。

開館1カ月で観覧者一万人を達成、学芸活動より、絵はがき売りに追われる夏です。

(鹿追町立神田日勝記念館学芸員)



考 えの 小 窓

ホーキングと2600語のワープロ

鈴木 正實

今年の春先、一般入館者から苦情の葉書が届いた。館内の温・湿度が高すぎて不快な気分となり、満足な鑑賞もできずに美術館を後にしたと書いてあった。春先や初冬の外気はその日によって大きな変動があり、そのつどの温・湿度調整はむつかしく、どこの美術館でも苦労していることであろう。外気との差がおおきい北海道の美術館の場合はなおさらである。さてこの件もさることながら、最後に書かれていた次の一節が気になった。

「又、ついでなのですが、解説文の字を大きく内容もわかりやすくをお願いします。学のある人（例えば貴方達）ばかりが対象ではないのです。」

解説パネルについては、だれしもが展覧会のたびに読みやすく、判りやすくを心がけて、文章内容はもとより字数や文字の大きさなどにも留意しているはずである。だからこそ、わずか200字の解説文に呻吟することもしばしばである。

解説パネルのむつかしさは、観覧者の美術に対する基礎知識のレベルの多様さにあるといいきってもよいだろう。子供を対象とした企画以外は、一般の成人に合わせるというものの、その成人個々の知識のレベルにはかなりの幅があるのだ。それが特にダイレクトに関わってくるのが美術の専門用語であり、我々はそ

れを使わざるをえない。ことこまかに用語説明ができない場合もある。

1990年、英国の理論物理学者のS. W. ホーキングが来日し最新の宇宙論についての講演を行った。それを和訳した文章を読んだが、これが実に平明で読みやすい。ブラックホールやベビーユニバースなどの専門用語の説明も簡潔、かつ判りやすい。いや深く理解できないまでも親しみやすく、自らもうすこし詳しく調べてみようという気さえおこさせる。ホーキングは運動神経系の難病で声を失ってから、指先で簡単に操作できる特殊なワープロを使うようになった。それに登録されている単語は2600語という非常に少ないものであり、これが彼の論文、特に啓蒙論文を判りやすくしているといわれる。つまりこのワープロは彼の豊富な専門的知識の言語変換を規制したが、それゆえに門外漢にも親しまれる言語表現を可能にしたのである。

解説文の字数や文字の大きさなどは博物館学的に依拠できる基準がある。しかし文章表現となればそうした数値で示される基準はなく、ひとえに個々の書き手の創意に委ねられるといってもよい。それを思えばホーキングと彼のワープロの関係が、我々に示唆しているものは決して小さくはなからう。

（道立近代美術館学芸部参事）

●北海道美術館学芸員研究協議会規約●

第1条（名称） 本会は北海道美術館学芸員研究協議会（略称 道美学芸研）と称する。

第2条（目的） 本会は博物館学、美学、美術史等についての研究、協議を行うとともに会員相互の連携、情報交換を図り、北海道の美術館学芸員の資質の向上および各美術館の活動の充実に資することを目的とする。

第3条（事業） 本会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。

1. 総会・研究会の開催
2. 会報の発行
3. 研究協議内容の収録
4. その他必要な事業

第4条（会員） 本会は北海道の美術館学芸員によって組織される。

第5条（事務局） 本会の事務局は道立近代美術館学芸部におく。

第6条（役員） 本会の役員は下記のとおりとする。

- | | |
|---------|--|
| 会 長（1名） | 道立近代美術館より選出 |
| 副会長（1名） | 道立美術館以外の美術館より選出 |
| 幹事長（1名） | 道立近代美術館より選出 |
| 幹 事（6名） | 道立近代美術館より2名、他の道立美術館より2名、道立美術館以外の美術館より2名を選出 |
| 会 計（1名） | 道立近代美術館の幹事より選出 |
| 監 査（2名） | 会計以外の幹事から互選 |

※役員の任期は2年とする。但し再選は妨げない。
また欠員がでた場合、当該美術館から補い任期満了まで務める。

第7条（会計年度） 本会の会計年度は4月1日から翌年3月31日までとする。

第8条（会費） 会費は年3,000円とする。

付則 本規約は平成5年4月1日から施行する。

●北海道美術館学芸員研究協議会会員名簿●

平成5年8月1日現在（五十音順）

浅川 真紀	北海道立近代美術館学芸員	菅 訓章	鹿追町立神田日勝記念館学芸員
浅川 泰 同 上	学芸第二課長（幹事）	鈴木 正實	北海道立近代美術館学芸部参事（幹事長）
井内佳津恵	同 上 学芸員	平 利弘	同 上 学芸員
五十嵐聡美	同 上 学芸員	地家 光二	北海道立三岸好太郎美術館主任学芸員（幹事）
井上みどり	札幌彫刻美術館学芸員（幹事）	寺嶋 弘道	北海道立帯広美術館学芸課長
越前 俊也	北海道立近代美術館主任学芸員	土岐美由紀	北海道立近代美術館学芸員
大下 智一	北海道立函館美術館学芸員	苦名 直子	北海道立三岸好太郎美術館学芸員
大野 正勝	芸術の森美術館学芸員	苦名 真	北海道立近代美術館学芸員
奥岡 茂雄	北海道立近代美術館学芸部長（会長）	長瀬 美香	同 上 学芸員
釜沢 恵子	荒井記念美術館学芸員	中村 聖司	北海道立旭川美術館学芸員
鎌田 享	北海道立近代美術館学芸員	長谷川彰子	芸術の森美術館学芸員
久米 淳之	岩内町木田金次郎美術館開設準備室学芸員	羽二生七重	市立小樽美術館学芸員（幹事）
笹野 尚明	芸術の森美術館副館長（副会長）	穂積 利明	北海道立函館美術館学芸員
佐藤 友哉	北海道立近代美術館学芸第一課長（幹事）	水田 順子	北海道立近代美術館主任学芸員
佐藤由美加	北海道立旭川美術館学芸員	光岡 幸治	北海道立帯広美術館学芸員
佐藤 幸宏	北海道立帯広美術館学芸員	村山 史歩	釧路市生涯学習センターアートギャラリー学芸員
柴 勤	北海道立函館美術館学芸課長	吉崎 元章	芸術の森美術館学芸員
新明 英仁	北海道立旭川美術館学芸課長（幹事）		

（計35名）

■ 発信

▼北海道博物館協会から道美学芸研に対する助成として20,000円の研修費が決定した。この欄をかりて同協会に厚く謝意を表したい。▼総会抄録に掲載した荒井記念美術館の実践報告にある「荒井記念美術館大賞展'93」の審査が去る7月27日に行われ、大賞にはイタリア在住の彫刻家、安部成孝氏の「月と風」、特別賞は永野光一氏の「記憶の滴」が選定された。ノミネートされた10作家の作品は同館内や前庭に展示されているが、これにより『生れ出ずる悩み』をテーマとしたコレクションがかなり充実した感がある。2回の大賞展で絵画、現代彫刻と展開してきたが、今後どういう方向に進んでいくのか楽しみである。▼また札幌彫刻美術館第6回本郷新賞も決まった。26点の推薦作の中から〈洞爺湖ぐるっと彫刻公園構想〉の一環として洞爺湖浮見堂公園に設置された渡辺行夫氏の「風待ち」が受賞作となった。8月26日から「受賞記念渡辺行夫彫刻展」が同館で開催される。▼北海道新聞（7/29）の記事にもあったように全国的に美術館の入館者が減少している。そこにも書かれているように、経済の悪化にともない芸術を楽しむ精神的ゆとりが生まれない

・ 受信 □

のか。レジャーの多様化の影響もあるのか。レジャーといえば今年の夏も「安・近・短」の傾向にあるようだ（日経産業7/5）。またかつてのトレンド指向が低下し、だれもが知っている“人気商品”、たとえばJリーグやジュラシックパーク、『磯野家の謎』などサザエさんに関する出版物等、わかりやすいものに消費者が殺到しているということだ（日経流通7/1）。▼「大衆」から「分衆」、そして再び大衆の復活へという図式が成立しそうにも思えるが、今日のこうした傾向も変動しやすいようだ。ともあれ美術館の入館者予測が難しい状況にあることはたしかだ。▼こうしたなかで、6月に開館した神田日勝記念館の入館者は2カ月も経ずに2万人を越えた。日曜日は1,000人以上という。開館した年が盛況なのはこれまでも多くの例にあるが、それにしても予想をはるかに上回る。帯広、旭川、釧路など道内各地からの来館が多いようだが、菅学芸員によると入館者数が落ち着く来年度以降にアンケートをとってみるそうだ。なお菅氏は当会新会員である。

（鈴木）